

## 書評

荒谷大輔著

『資本主義に出口はあるか』

(講談社現代新書、2019年)

小城 拓理

本書の目的は、新しい枠組みをもとに世界史を振り返りながら、ネオ・リベラリズム的な現代の資本主義の出口を探ることである。本書は全四章から成る。まず、序と第一章では、従来の「右／左」や「保守／リベラル」の枠組みでは説明できない事象が政治や経済の領域で生じているとして、「ロック／ルソー」という新しい枠組みが提案される。ロックとルソーと言えばホブズと並んで社会契約論者として知られている。しかし、荒谷によるとロックとルソーは根本的に相いれない社会を構想していた。両者の違いは自由、平等、政府の捉え方に現れる。ロックは「消極的自由」、「機会の平等」、そして「小さな政府」を主張したのに対して、ルソーは「積極的自由」、「結果の平等」、そして「大きな政府」を主張した。

第二章と第三章ではロックとルソーという新しい枠組みによって近現代の世界史の流れが整理されている。まず、19世紀においてロックの影響は経済の領域で見られる。ロックの私的所有権論に基づく資本主義によって自由競争が推進され、莫大な利益がもたらされた。しかし、その結果、労働者の生活水準は劣悪なものとなり、ロック的な社会の変革が叫ばれるようになる。一方、ルソーの影響は文化や芸術におけるロマン主義や教養主義に見て取ることができる。こうした文化的潮流はロック的な社会を克服すべく社会の平等化を進めようという動きと合流し、社会主義やファシズムに影響を与えることとなった。だが、この両者のルソー的な試みが失敗に帰したことは歴史を見れば明らかである。このように世界史の舞台でロックとルソーは鋭く対立してきた。ところが、第二次世界大戦後のいわゆる戦後民主主義の枠組みにおいて両者の共存が実現することになる。というのも、ロック的な社会の行き過ぎによる労働者の貧困化を、国家によるルソー的な介入、例えば所得の再分配によって防ぐ試みがなされたからだ。

このような取り組みにより経済成長と労働者の生活の安定化が同時に実現した。しかし、この蜜月は長くは続かなかった。1970年代以降の不況の中で、労働者を切り捨てるネオ・リベラリズム的な資本主義が全世界を席卷しているのである。

では、以上のような資本主義に出口はあるのか。第四章ではいよいよ荒谷の答えが示される。結論から先に言えば、出口はある。これを見出すためにまず必要なのはこの資本主義の社会を自明視しないことである。この資本主義の社会は不変でも絶対でもないのだ。そして、ここで強調されるのが哲学の重要性である。というのも、哲学こそ社会を根本から問い直す営みだからである。言うなれば哲学という武器によって、資本主義というマトリックスの外にまず出ることが肝要なのである。最後に荒谷は、個人の自由と平等を前提にした新しい社会契約が今まさに求められていると結論付けている。

私見では、本書の特長は、やはり「ロック／ルソー」という新しい枠組みを提案したことにあるだろう。評者自身、従来の「右／左」や「保守／リベラル」という枠組みに隔靴搔痒の感を覚えてきた。これに対し荒谷の提案は世界史の流れを見通しやすくすることに成功している。他方、新しい社会契約を結ぶという荒谷の結論に対しては抽象的過ぎて疑問を感じる読者もいるのではないだろうか。実際、本書の中で荒谷はこの新しい社会契約なるものの内実を詳らかにしているわけではない。だが、それは荒谷への無いものねだりであろう。なぜなら、その答えは哲学する読者自身に委ねられているからである。資本主義の歴史を振り返り、その行く末を考えるためにもぜひ本書の一読を勧めたい。